奈良教育大学紀要　第63巻　第１号（人文・社会）平成26年
Bull. Nara Univ. Educ., Vol. 63, No.1 (Cult. & Soc.), 2014

『マンスフィールド・パーク』におけるアイロニーの技法
―オースティンの英国地主階級への批判―

門　田　　守　英語教育講座（英米文学）

（平成26年５月７日受理）

The Art of Irony in *Mansfield Park* : Austen's Criticism on the English Landed Gentry

Mamoru KADOTA
(Department of English, Nara University of Education)
(Received May 7, 2014)

Abstract

What characterises Austen's *Mansfield Park* most conspicuously is its use of irony, which effectively contributes to her criticism on the English landed gentry. For example, Austen intentionally avoids depicting the scenery of Mansfield Park itself, probably with the intention of reducing the dignity of Sir Thomas Bertram, the head of his family. Almost all the people except Edmund Bertram and Fanny Price fall victim to Austen's pungent satire on the English middle-class society. Anecdotes about the major characters' visit to Sotherton Court are designed for two purposes: the clarification of the major characters' personalities and the ironical revelation of the landed gentry's moral depravity. The unfulfilled family play, *Lovers' Vows*, at Mansfield ironically triggers off ignominious love affairs of Maria and Julia Bertram with Henry Crawford and John Yates respectively. Fanny's return to her parental home in Portsmouth is originally intended by Sir Thomas to persuade her to accept Henry Crawford's offer of marriage, so that the Bertrams could enjoy a solid economic foundation. This attempt, however, ironically brings everlasting shame to the family name, and Sir Thomas experiences the disintegration of his family. Austen's heavy dependence on the use of irony is caused by her making Fanny Price vulnerable to Sir Thomas' patriarchal power and also by her criticising the degeneration of the English middle-class morals.

キーワード：オースティン，『マンスフィールド・パーク』，アイロニー，地主階級，批判

Key Words：Austen, *Mansfield Park*, irony, landed gentry, criticism

１．はじめに

ジェイン・オースティン（Jane Austen）の『マンスフィールド・パーク』（*Mansfield Park*, 1814）は，アイロニーの言語によって構築された小説である。アイロニーとは「実際の意味とは異なる意味を暗示することによって特別な効果を挙げるレトリック」と定義され，主に諷刺において「対象を批判しつつ，真理を暗示する機能」であると考えられる。(1)この小説はタイトル自体が，アイロニカルなニュアンスを含んでいる。読者は『マンスフィールド・パーク』には，マンスフィールド・パークの庭園を含む大邸宅の様子が描き込まれていると期待するであろう。ところが，案外とマンスフィールド・パーク自体の描写は少ないのである。この地所はイングランド中部地方のノーサンプトンシャー（Northamptonshire）に位置している。領主はサー・トマス・バートラム（Sir Thomas Bertram）といい，この領地の管理運営に余念がない。領地の維持管理と領地をめぐる秩序の保持こそが，サー・トマスの生き甲斐なのだ。小説中，この領地の描写は女主人公ファニー・プ

ライス（Fanny Price）の行動をめぐって行われることが多い。たとえば，彼女はマンスフィールド・パークの春の風景をこう描写している。

> What animation both of body and mind, she had derived from watching the advance of that season which cannot, in spite of its capriciousness, be unlovely, and seeing its increasing beauties, from the earliest flowers, in the warmest divisions of her aunt's garden, to the opening of leaves of her uncle's plantations, and the glory of his woods. (393)[2]

しかも，これは彼女が資産家で色男のヘンリー・クローフォド（Henry Crawford）からの求婚を拒絶してサー・トマスの怒りを買い，ポーツマス（Portsmouth）の実家に返されて三ヶ月近く経ってからの回想なのである。彼女の目の前に，実際にはこの風景は広がっていないのである。マンスフィールド・パーク自体の風景描写はある種の禁忌の状態に置かれ，風景は女主人公が織りなす人間関係をとおしてのみ描かれる。風景は彼女の心理と関連づけられ，いわば人間化されてしまうのだ。領地はどのくらいの広さがあるのかさえ，読者には知らされない。オースティンは，そもそもマンスフィールド・パークをその領主に権威を与えるものとして考えていないのではあるまいか。領地は伝統文化の維持管理母体として考えられそうであるが，実はそうではない。邸宅は威厳のある雰囲気を持つとはいえ，基本的に登場人物たちが触れあう場所に留まっている。邸宅は権威の維持に貢献していないのだ。オースティンは読者の期待を裏切り，マンスフィールド・パークの威厳の雰囲気を醸し出しつつも，アイロニーの言語をとおしてその価値を貶めているのである。

地所の描写も意味深いが，オースティンの技法の冴えは，個々の登場人物をめぐって展開されるアイロニーの言語において最も端的に見ることができる。その個々の人物関係をめぐるアイロニーの展開も，全体として地主階級のモラルへの批判へと向けられている。すなわち，そのアイロニーは他のオースティンの作品と比較して，特定の社会階層への批判的姿勢が一層強いと言えよう。そこで『マンスフィールド・パーク』を女主人公の行動を追いつつ，いくつかの場面に分け，それぞれの場面におけるアイロニーの効果を分析してみたい。その結果として，表層的な理想のエステイトとしてのマンスフィールド・パークの讃美の裏側に，しっかりと地主階級への非難が込められていることがわかるであろう。田舎のカントリーハウスを中心として成り立った文化体制がいかに脆いものであるのかも，同時に明白となるであろう。

2．偽装されたエステイトの威厳

マンスフィールド・パークは本当に威厳あるエステイトを構成しているのだろうか。荘園領主の脈々として続く威厳は保持されているのだろうか。オースティンはこの小説において，大いにナラティヴに参加している。読者に直接語りかける部分もあるために，オースティン自身がナレーターを兼ねていると考えてよいだろう。そのナレーターであるオースティンは，マンスフィールド・パークの家系についてほとんど何も記していない。確かに，この領地の当主サー・トマス・バートラムは準男爵（baronet）である。しかし，準男爵は英国最下層の世襲位階であり，貴族ではない。ナイト（knight）よりは上位であり，サーの称号はつくのだが，貴族とは認められない。この微妙な社会的位置づけが，バートラム家の立場の特徴となっている。爵位としての威厳は確かにバートラム家にある。しかし，オースティンはその家系については触れていない。かりそめにも準男爵である以上，そう簡単な家系で済むはずはない。この家系が醸し出す威厳の描写も，意図的に忌避されているのだ。バートラム家は威厳がありそうで実は威厳がない，いわばアイロニーで描かれた家系なのである。

立派な屋敷に恵まれており，サー・トマスは年に7千ポンドの収入を得ている。しかし，威厳のある暮らしを続けるのは，実を言えば苦しいことなのだ。事実，マンスフィールド・パークの牧師任命権は，グラント博士夫妻（Mr. and Mrs. Grant）という，もともとバートラム家とは縁もゆかりもない一家に譲られてしまっている。本来なら，サー・トマスは牧師任命権を牧師志望の次男エドマンド（Edmund）のために保持しておくか，誰か信用のおける管理人に委ねるべきであった。ところが，領地の管理維持が経済的に苦しいものだから，マンスフィールド・パークの牧師館はグラント博士夫妻に譲られているのだ。実は，この牧師館には「身内の」前任者が暮らしていた。サー・トマスの妻はマライア（Maria），あるいはバートラム令夫人（Lady Bertram）と呼ばれる。彼女の旧姓はウォード（Ward）である。このウォード家には長女のウォード嬢（Miss Ward），次女のマライア，三女のフランシス（Frances）がいる。長女のウォード嬢は牧師と結婚して，ノリス夫人（Mrs. Norris）となっている。このノリス夫妻が，もともとマンスフィールド・パークの牧師館に暮らしていたのである。しかしながら，夫ノリス氏の死に際し，サー・トマスは最初ノリス夫人を牧師館に住まわせていたが，牧師任命権を人に譲るために彼女に牧師館から自邸へと移住してもらわざるを得なかった。その後，ノリス夫人はホワイトハウス（White House）というこぢんまりした家屋に移ることになる。一族の人間が保持すべき資産が他人の管理に移らざるを得なかったのだ。これもバートラム家の経済的内実を暴露する事実である。

バートラム家が没落の淵にある原因は多々ある。一つ目は長男のトム（Tom）がひどく無能な男で，浪費癖が強いことである。25歳の長男トムが莫大な借金をつくったため，その支払いに充てる目的で牧師館は一族の手を離れることになる。（念のため，トムの本名はトマスだが，作中ではトムと呼ばれている。）24歳の次男エドマンドは，その割を食って，本来自分が引き継ぐことになる屋敷を失った格好だ。二つ目はバートラム家が地代を主たる収入源とする18世紀的な地主層から，実態としては貿易つまり商売による収益に依存した企業家層に変貌している点に求められる。サー・トマスは西インド諸島の東部にあるアンティグア（Antigua）島にプランテーションを所有しており，この農園経営によって主たる収入を得ている。つまり，イングランドにとって不名誉となりうる奴隷貿易を含む，いわゆる三角貿易にバートラム家の領土管理は依存しているのである。しかも，この恥辱的商売は最近になって，かなり実入りが悪くなってしまったらしい。このため，出来の悪い跡取りのトムを連れて，サー・トマスは自ら農地管理の指揮を執るべくアンティグアに赴かなければならなくなってしまう。このようにバートラム家は見かけ上威厳を保っているようでありながら，実際の内情は苦しいものなのだ。ジェントリーの威厳を描きながらも，オースティンのナラティヴに従っていくと，予想外にバートラム家の台所事情が悪いことがわかってくるアイロニカルな仕掛けがこの小説には施されているのである。

こう考えてくると，オースティンがマンスフィールド・パーク自体の荘園の描写にはほとんど手をつけていないことは，実は周到に考え出された描写上のスタンスとは言えないであろうか。バートラム家の荘園は立派なものではないかもしれず，また仮に立派な荘園ではあっても，この一家がそういうものを継承するに値する一家ではないことをオースティンは暗示しているかもしれないのである。

3．マンスフィールド・パークの家族たち

アイロニーは登場人物たちのキャラクタリゼーションにも認められる。まずは，サー・トマスは基本的に怒りっぽく，家族に愛情があるように見えながらも，結局は金銭を第一に考える人間である。地主に期待される領民への父性的愛情はどこにも見えない。家屋敷の威厳とはまったく縁のない人間である。小作人や領地民に何かを与えるとか，面倒を見るとかいう姿勢もまったくない。家庭内でも威圧的であるが，実は家族に敬われているわけでもない。簡単に息子や娘に裏切られてしまう。一見押しが強く，家族たちは叱られるとすぐに従うが，それは彼が父権をふりかざすからにすぎない。本当に領主としての威厳は彼にはないのだ。

残りの家族も，領主の一家に似つかわしい性格は持っていない。[3]妻のバートラム令夫人はペットの狆と遊ぶか，室内遊戯に興じるか，欠伸をするか，居眠りをするかしか能がない女性である。取り柄は美貌だけで，何をするにもおっとりしている。彼女がきちんと家政を取り締まる場面は見られない。荘園領主の奥方に期待される威厳はうわべだけで，実際には何の能力もない。彼女の姉のノリス夫人は吝嗇家で，ことあるごとにファニーに冷たく当たる。家庭内では目下に来るのが彼女しかいないためである。その割には，ファニーには教育的指導をしているようなふりをしている。バートラム令夫人が無能であるとすれば，ノリス夫人は性格的にひねくれていると言えよう。

子供たちに目を転じよう。長女のバートラム嬢は21歳で，次女のジュリア（Julia）は20歳である。彼女たちは美貌に恵まれ，家庭教育も受けているが，父親を敬うところがまるでない。父親の留守中に自制心を働かせて待つことをせず，後に見るように父親の書斎を改装して家庭劇を上演しようとする。自制心のなさは，小説後半において両者共に金持ちの放蕩息子たちと駆け落ちすることに結びつく。自分たちに学があることをひけらかすために，末娘のファニーがまっとうな教育を受けていないことをこのようにひどく馬鹿にしたことさえあった。

> ‘Dear Mamma, only think, my cousin cannot put the map of Europe together—or my cousin cannot tell the principal rivers in Russia—or she never heard of Asia Minor—or she does not know the difference between water-colours and crayons!—How strange!—Did you ever hear any thing so stupid?’ (15)

長男のトムは25歳で典型的な放蕩息子である。衝動的に行動する性分があり，小説後半で落馬して大怪我を負う。しかも，養生をしないものだから，慢性的な消耗性の熱病にかかってしまう。次男のエドマンドは24歳で，兄とは打って変わって落ち着きがあり，観察力と判断力に恵まれた青年である。しかしながら，後に見るように美人だが金銭に執着するメアリ・クローフォド（Mary Crawford）に夢中になってしまう。心の深層まで人の価値を見通す能力はエドマンドには備わっていない。[4]

唯一，マンスフィールド・パークの威厳に適合する人物は18歳の末娘ファニーである。これは実にアイロニカルな設定ではあるまいか。ファニーはウォード家の三女フランシスが，貧しい海軍中尉の男と周りの反対を押し切って結婚して産んだ長女である。10人の子沢山に恵まれてあまりに生活が苦しいものだから，ファニーは10歳のときにバートラム家に引き取られたのである。姓もプライスのままで，バートラム家の直系の子孫ではない。

教育は不十分にしか与えられていない。飲酒癖のある父親，貧相な家屋，不潔な部屋，下品な言葉，栄養不良の食事，わめき声を上げて走り回る子供たち，美人だが生活苦のため老け込んだ母親等―これらはとても賢い子を生み出す環境とは言いがたい。とは言っても，環境が反面教師となるのであろうか，ファニーはやや虚弱体質ではあるにせよ，読書好きで落ち着きのある子供に育っていった。忍耐心が強く，隣人への気遣いが厚く，人の心の深層まで見通し，しかも長期的視点から行動の是非を判断できる人間に育っていった。ひとことで言うと，最もバートラム家の血を引き継ぐに相応しい人間―つまり将来の奥方になるに相応しい人間―になったのである。勤労階級の娘が地主階級の文化とモラルを救うとはアイロニーが強すぎて，にわかに信じがたい設定である。

しかも，よほどこの設定が気に入ったのか，オースティンは追加的な要素さえ持ち込んでいる。小説の最終場面において，ファニーはプライス家の14歳になる次女スーザン（Susan）をマンスフィールド・パークに連れてくる。この娘はファニーに似てプライス家の欠点を痛感し，向上への強い意欲を胸に秘めている。このことをファニーは密かに見て取り，彼女をバートラム家に迎え入れることにしたのである。このスーザンは日々落ち着きのある娘に成長し，将来的にマンスフィールド・パークを救う存在になることが予見される。次世代のバートラム家をも救うアイロニーが用意されているのである。

マンスフィールド・パークをめぐる人間関係の布置そのものが，アイロニーの構造を提供している。10歳のときにもらわれてきた少女が，領地の維持管理に必要不可欠な存在となるとは実にアイロニカルである。バートラム家の家族がほとんど使い物にならないほど愚鈍で，外部の血を注入されてようやく荘園の威厳を保つことができるのである。この小説においては，サザトン（Sotherton）という領地を所有するジェイムズ・ラッシュワス（James Rushworth）という地主も登場する。この男はバートラム家の長女マライア（バートラム嬢ともいう）と結婚するのだが，反応の鈍い人間であり，どう見ても愚鈍である。事実，彼は妻に駆け落ちされてしまう。クローフォド兄妹の父親クローフォド提督（Admiral Crawford）はロンドンで愛人と暮らすいかがわしい男である。そうしてみれば，この小説では，社会の上層階級には誰一人としてろくな人間がいないことになってしまう。心温まる人間たちはプライス家の一部の家族に限られるだろう。つまり，プライス家の長男で，19歳になる海軍少尉のウィリアム（William），ファニー，スーザン―この三人だけが人間としての良識を示している。社会的弱者が社会的強者を救うモラルを提供すること―これもまた，アイロニカルではないだろうか。

4．サザトンへの訪問が持つ意味

バートラム家とクローフォド家の面々によるラッシュワス家の領地サザトンへの訪問は，二つの意味を持つ。一つ目はサザトンの荘園にまつわるアイロニーを提示すること，二つ目は主要登場人物の性格を明確にすることである。ラッシュワス家はバートラム家よりも広大な領地を所有し，領主のラッシュワス氏はサー・トマスよりも多くの収入を得ている。このためラッシュワス氏とバートラム嬢の縁談はとんとん拍子に進み，二人は既に婚約している。特にサー・トマスはこの縁談に積極的であり，金銭目的の態度を丸出しで長女の嫁入りを実現しようとしている。このような縁故関係から立派なサザトンへの訪問話が起こり，ちょうどヘンリー・クローフォドが大型馬車を所有していたため，暇な両家の面々たちは喜び勇んで小旅行を実行することになるのである。ヘンリーとメアリのクローフォド兄妹はグラント夫人の母親が再婚後に産んだ子供であり，そのためグラント家の牧師館を訪問中にマンスフィールド・パークの人々とお近づきになったのだ。

オースティンはマンスフィールド・パークの荘園描写を故意に避けているが，サザトンの荘園は念入りに描いている。他家の荘園を詳しく描くことは，アイロニーの効果を生むと言ってよいだろう。マンスフィールド・パークは何やら空虚な，取るに足りない領地のように思えるからだ。ラッシュワス家の年収が１万２千ポンド，バートラム家のそれが７千ポンドだから，荘園の取り扱いに大きな違いをつけるほどの金額差ではない。ただし，ラッシュワス家はロンドンにも別邸を所有し，ラッシュワス氏は特に仕事をしている様子はない。この点から，彼はより羽振りの良い，純粋な地主階級に属すると言えるだろう。

10マイルほどの旅程を経て，馬車はサザトンの領地に入る。森の中を抜け，屋敷が馬車からの視界に入ってくる。ファニーはこんなふうにその風景に夢中になってしまう。

> Her eye was eagerly taking in every thing within her reach; and after being at some pains to get a view of the house, and observing that ‘it was a sort of building which she could not look at but with respect,’ she added, ‘Now, where is the avenue? The house fronts the east, I perceive. The avenue, therefore, must be at the back of it. Mr. Rushworth talked of the west front.’ (74)

建物は所有者への敬意をかき立てる立派なものだった。バートラム嬢の話によれば，特に教会の尖塔が優美な姿を誇っているらしい。樫の林はラッシュワス家の盤石な経済基盤の反映のようだ。まずは立派な荘園領主の威風

堂々とした家屋敷が提示されている。

ところが，見かけの立派さとは対照的に，屋敷の内部は敬意をかき立てるものではなかった。眺望を楽しめる設計になっておらず，不必要に部屋数が多かった。これでは窓税の支払いが大変だし，女中の仕事を増やすばかりと思えた。特にひどいものは礼拝堂だった。一家の魂の拠り所と思える礼拝堂がまったく重々しさを欠いており，やたらに広くてマホガニーの家具調度品が多く，礼拝道具がただ置いてあるだけであった。ファニーは傍らにいたエドマンドに，こんなふうに自分の考えていた礼拝堂のイメージと現実の礼拝堂の姿とのズレを指摘する。

> 'I am disappointed,' said she, in a low voice, to Edmund. 'This is not my idea of a chapel. There is nothing awful here, nothing melancholy, nothing grand. Here are no aisles, no arches, no inscriptions, no banners. No banners, cousin, to be "blown by the night wind of Heaven." No signs that a "Scottish monarch sleeps below."' (76-77)

ファニーが心の中に蓄積した荘園屋敷にあるべき，重々しい，時代がかった礼拝堂のイメージが正統のものであるならば，確かに目の前に広がるサザトンの礼拝堂はその基準に適合するものではない。

この発言に対し，エドマンドは礼拝堂が新しく見える理由をきちんと解答している。

> 'You forget, Fanny, how lately all this has been built, and for how confined a purpose, compared with the old chapels of castles and monasteries. It was only for the private use of the family. They have been buried, I suppose, in the parish church. *There* you must look for the banners and the achievements.' (77)

ファニーはこの解説に納得するが，その直後にラッシュワス夫人（ジェイムズの母親）によるガイド説明の声が次のように響く。

> 'This chapel was fitted up as you see it, in James the Second's time. Before that period, as I understand, the pews were only wainscot; and there is some reason to think that the linings and cushions of the pulpit and family-seat were only purple cloth; but this is not quite certain. It is a handsome chapel, and was formerly in constant use both morning and evening. Prayers were always read in it by the domestic chaplain, within the memory of many. But the late Mr. Rushworth left it off.' (77)

これは先ほどのエドマンドの解説と真っ向から矛盾する説明である。ジェイムズ二世はイングランドとスコットランドの王を兼任した人物で，在位期間は1633-1701年であった。つまり，この礼拝堂は本当に古い，格式あるものであったわけだ。それが長きにわたって使用されず，ただ見るだけの設備に変わってしまったために，こんなに新しいものに見えるのであろう。家人たちに使われてきた伝統がこの礼拝堂には欠けているのである。礼拝堂は立派だが信仰という中身がない器のようなものである。地主階級の威厳のなさが「新しく見える」という姿によって，アイロニカルに示されているのだ。

一行は礼拝堂を出て，庭園を散策し始める。くねくねと曲がった森の道を進むと鉄門があり，鍵がかかっていてそれより先に進むことができない。良い風景を楽しむためには，鉄門の先に広がる小高い丘の上まで行かねばならない。ラッシュワス氏は愚かなことに鉄門の鍵を忘れてきて，皆を門前に待たせて，自分は屋敷まで急いで鍵を取りに帰ると言う。前もって散策ルートを考えておくのは，地主階級の紳士としての義務である。勘ぐって考えれば，彼は庭園そのものにあまり関心がないのかもしれない。庭園を自己の権力の証とばかり友人たちにひけらかしても，そのことがアイロニカルに彼の地主階級としてのアイデンティティの危うさを示す結果となったのではあるまいか。

クローフォド氏とバートラム嬢はラッシュワス氏の到着を待たずに，あっさりと鉄門をくぐって先に進んでしまう。もちろん，これは領主ラッシュワス氏に対して失礼なことである。ファニーはいけないと叫ぶが，そんなことはお構いなしに彼らは行ってしまう。自分がラッシュワス氏と婚約していることも，バートラム嬢は意に介さない。次に門までやって来たジュリアも，あっさり塀をよじ登って先に行ってしまう。クローフォド嬢とエドマンドがどこにいるのかというファニーの質問にも，ジュリアはまったく答えない。ほどなく，ラッシュワス氏は戻ってくるが，自分を無視して先に行ってしまったクローフォド氏とバートラム嬢には不満そうである。驚いたことに，エドマンドとクローフォド嬢は既に先回りしており，並木道の木の下に座っていた。彼らの進んだルートには鍵のかかっていないくぐり戸があって，そこを通って先に行けたのだった。小一時間も誰にも相手にされなかったのはファニーだった。(5)

この散策からわかることは，クローフォド氏とバートラム嬢の身勝手さである。他人の庭園内を勝手気ままに歩き回り，招待主の行動を無視してかかるのはまったく許されることではない。自分たちが楽しければそれでよいという態度なのであるが，特に不道徳的なのはバートラム嬢に門をくぐるよう勧めるクローフォド氏の次の言葉である。

> 'And for the world you would not get out without the key and without Mr. Rushworth's authority and protection, or I think you might with little difficulty

pass round the edge of the gate, here, with my assistance; I think it might be done, if you really wished to be more at large, and could allow yourself to think it not prohibited.'(89)

自分の婚約者を差し置いて，若い男と連れ添って進むことは常識を欠く行為である。「自由になりたければ，許されていると思えるのならば」自分についてこいと勧めることは，もはや誘惑と呼んでよいだろう。これは後に彼らが駆け落ちする伏線となる行動である。ジュリアの塀を越える行為も，彼女が後にジョン・イェイツ（John Yates）という貴族の息子と駆け落ちする伏線となっている。そして，エドマンドとクローフォド嬢が仲睦まじいことも，後に彼らが結婚寸前まで関係を深めることの伏線をなしている。

この辺りの筋書きの展開は，登場人物のキャラクターの明確化が主たる描写の目的となっている。ただし，指摘すべきことは「土地」に対する彼らの意識の差であろう。ラッシュワス氏は先祖伝来の地に手を入れ，改良を加えることにやぶさかではない。サザトンの屋敷はサザトン・コート（Sotherton Court）というが，エリザベス朝に竣工した立派な邸宅である。ラッシュワス氏はこれを改良したくてしょうがないのだ。彼はノリス夫人に対してこんなふうに告白している。

'It [Sotherton Court] wants improvement, ma'am, beyond anything. I never saw a place that wanted so much improvement in my life; and it is so forlorn, that I do not know what can be done with it.'(47)

気になるのは「自分ではどうしていいのかわからない」と臆面もなく述べていることである。彼によると，友人のスミス（Smith）という人間が，彼の所有するコンプトン（Compton）という荘園の改良に大成功したらしい。このスミスという人間やコンプトンには，実に簡単にしか言及されていない。スミスというありきたりの姓からして，ラッシュワス氏には誰にでも言われたらさっさと従ってしまう，愚か者という性格が付与されているのかもしれない。スミスはハンフリー・レプトン（Humphrey Repton）という造園家に頼んで，上出来の庭園を仕上げてもらった。この話を聞くと，途端にラッシュワス氏は彼なら日当５ギニーを払って雇っても惜しくないと言い出す。レプトンは1752年から1818年まで生きた，英国風景式庭園の造園家でランスロット・ブラウン（Lancelot Brown）の後継者である。この話から『マンスフィールド・パーク』が位置づけられた年代の特定化が可能である。さて，ラッシュワス氏は何の躊躇もなく，サザトンの並木を叩き切っても改良のためなら構わないと言う。

There have been two or three fine old trees cut down that grew too near the house, and it opens the prospect amazingly, which makes me think that Repton, or any body of the sort, would certainly have the avenue at Sotherton down ...(49)

荘園領主であれば，先祖伝来の樫の巨木を切り倒すことに躊躇するのが当たり前ではないだろうか。むしろ，巨木を伐採して並木道を切り開くのは，レプトンのような改良派の造園家の方から，嫌がる荘園領主に向けて説得することのように思われる。であるならば，これは地主と造園家の立場が逆になるという，アイロニーの効果が狙われている局面であると言えよう。そのアイロニーの効果によって，ラッシュワス氏が荘園領主として資質が批判されているのだ。少なくとも，彼には古い屋敷を中心としたコミュニティへの帰属意識が薄いように思われる。土地の持つ「人間を引きつける」力が，彼には的確に働いていないのだ。

逆の様相が展開されているのが，クローフォド氏の場合である。彼の領地はノーフォーク（Norfolk）のエヴァリンガム（Everingham）である。ジュリアに土地改良は好きかと訊かれて，彼はこう答えている。

'Excessively: but what with the natural advantage of the ground, which pointed out even to a very young eye what little remained to be done, and my own consequent resolutions, I had not been of age three months before Everingham was all that is now. My plan was laid at Westminster—a little altered perhaps at Cambridge, and at one and twenty executed ...'(55)

エヴァリンガムはもともと良い土地で，ほとんど手をつける必要はありませんでしたという趣旨の発言は，クローフォド氏が土地改良に興味がないことを示しているのではないだろうか。これを裏付けるのは，同じ境遇で育ってきた妹のクローフォド嬢が，父の提督からロンドン南西部のトウィクナム（Twickenham）に別荘を買ってもらったが，まったく改良に興味がなかったという発言である。彼女は泥や埃にまみれることが嫌いなのだ。言い換えると，彼女には土地への愛着心がまったくないのである。同じことは，兄にも当てはまらないだろうか。基本的にクローフォド兄妹はロンドンの都会暮らしが好きなのである。ということは，エヴァリンガムの荘園領主であるクローフォドは，本来自分が愛着を持つべき土地にまったく関心がないのである。所有地のコミュニティに帰属意識を持つべき領主が，まったく土地改良に関心がないというアイロニーがここで実現しているのだ。

主要登場人物たちのサザトンへの訪問は彼らのキャラクターを明確化しつつ，土地所有階級の持つべき美徳に関するアイロニカルな実態を提示するという機能を果たしている。地主の子供たちは自分たちの持つ土地を誇り

にしつつも，地主の持つべき土地への帰属意識を欠くというアイロニーを示しているのである。

5．家庭演劇と子供たちの裏切り

アンティグア島のプランテーションからの収益が思わしくなく，サー・トマスは長男のトムを連れて自ら農地経営の指揮を執りに行く。彼らの帰還は一年ほど先のことで，9月くらいになるらしい。トムが遊び仲間たちとの悪縁を切ることができるようにするのも，彼らの渡航の理由であった。ところが，この航海はアイロニカルな結果を引き起こすことになる。

サー・トマスの出立はマンスフィールド・パークの秩序を支えていた基盤の崩壊を招き，荘園の経済基盤は安定するにせよ，家族内の倫理関係が引き裂かれてしまう遠因を形成する。これは荘園の安定をもくろんでいた領主の意図とは違う結果である。農地経営の安定をもくろんだ彼が荘園自体の崩壊を早めるというアイロニーがここに成立する。また，トムが放蕩癖を克服するようにという願いは幾分果たせるにせよ，彼も交えたマンスフィールド・パークに居残った連中が道徳的に腐敗の一途をたどるというアイロニーが発生してしまう。その経緯の進展に大いに貢献しているのが，家庭演劇の上演に他ならない。(6)

家庭演劇の上演騒動に先立って，考察しておくべきなのは，メアリ・クローフォドの牧師という職業に関する見解の特徴である。彼女はエドマンドに向かって，牧師とは総じてこんな人間ばかりであると言う。

> It is indolence Mr. Bertram, indeed. Indolence and love of ease—a want of all laudable ambition, of taste for good company, or of inclination to take the trouble of being agreeable, which make men clergymen. (99)

クローフォド嬢が牧師を嫌う理由は，彼女の義理の姉グラント夫人の夫が美食家の牧師であることも影響している。クローフォド兄妹はマンスフィールド・パークを訪れる際に，グラント博士の牧師館を定宿としている。若死にするこの牧師が食事に文句ばかりを言い，姉が苦労しているのを，クローフォド嬢は嫌と言うほど見ているのである。はっきりと，このグラント博士を名指しして，彼女はこう非難している。

> And though Dr. Grant is most kind and obliging to me, and though he is really a gentleman, and I dare say a good scholar and clever, and often preaches good sermons, and is very respectable, *I* see him to be an indolent selfish bon vivant, who must have his palate consulted in every thing, who will not stir a finger for the convenience of any one, and who, moreover, if the cook makes a blunder, is out of humour with his excellent wife. (100)

牧師の職業の大切さについて，エドマンドはなんとか弁護しようとする。その際，彼が牧師とは海軍の艦船付けの牧師だけではないと述べると，途端にクローフォド嬢はこう怒り出す。

> 'I have been so little addicted to take my opinion from my uncle' (100)

これは明らかに，叔父のクローフォド提督を侮辱した発言である。この言葉を聞いたエドマンドは，早々にグラント博士の弁護を諦めてしまう。ファニーはグラント博士の非を認めつつも，牧師という職業は尊敬に値すると食い下がる。それでも，クローフォド嬢の牧師嫌いは改まる気配がない。確かに，ロンドンで愛人と暮らしている叔父は教育の手本にはならない。クローフォド嬢に決定的に欠けているのは，教育の手本となる人物である。後に見ることになるが，クローフォド兄妹は放蕩癖があるにせよ，生まれつき根性の歪んだ人間たちではない。クローフォド提督の女癖の悪さ，それに巨額の土地財産を相続したことによる奢りなど，ジェントリー層につきまとう腐敗的要素が，この兄妹がもともと持っていた向上への志向性を鈍らせてしまったのである。

さて，家庭劇に纏わる事件はいろいろな意味でアイロニカルである。まず，最初のアイロニーを考察しよう。サー・トマスは9月に戻る予定だったが，仕事があいにくと長引き，帰国は11月になってしまう。9月に戻ると言った以上，我が家の様子が気になったのか，彼は長男トムを先に単身で帰してしまう。トムは予定どおり9月に戻ってくる。単身帰国の理由は，はっきりとは述べられていない。彼は遊び癖がひどくても，一応は地主階級の長男である。長男は長子相続権に守られており，家督を一人だけですべて引き継ぐ権利を認められている。ということは，マンスフィールド・パークを守らなければならない責任は，本来ならばトムに負わされていることになる。ところが，このトムはウェイマス（Weymouth）辺りで知り合ったというジョン・イェイツという男を連れてくる。貴族の跡取り息子のイェイツはとんでもない放蕩者であり，彼こそが最初に家族劇をやろうと持ちかけるのである。ということは，家の秩序を守るべき長男こそが，秩序を破壊する最初の因子を家に持ち込んだというアイロニーが成立するのである。長男が帰ってこない方が家の道徳が守られるとは，痛烈なアイロニーではないだろうか。これはオースティンの面目躍如たる地主階級への道徳的批判と言えよう。

二つ目のアイロニーは劇の内容に関するものである。マンスフィールド・パークで演じられようとしている劇は，18世紀ドイツの劇作家コツェビュー（Kotzebue）による『恋人たちの誓い』（*Das Kind der Liebe*, 1791）

である。この英語版はインチボルド夫人（Mrs. Inchbald）によって*Lover's Vows*として訳され，1798年に出版されている。マンスフィールド・パークの面々が演じようとするのは，もちろんこの英語版の方である。劇の配役を示すと，次のようになる。

ウィルデンハイム男爵（Baron Wildenhaim）〔イェイツ氏〕
カッセル伯爵（Count Cassel）〔ラッシュワス氏〕
アンハルト（Anhalt）〔エドマンド・バートラム〕
フレデリック（Frederick）〔ヘンリー・クローフォド〕
執事，家主，農夫（Butler, Landlord and Cottager）〔トム・バートラム〕
アガサ（Agatha）〔マライア・バートラム〕
アミリア（Amelia）〔メアリ・クローフォド〕
農夫の妻（Cottager's Wife）〔グラント夫人〕

この劇において，ある貴族の父と娘がそれぞれ，本来の相手と連れ添うことになる。ウィルデンハイム男爵は女中のアガサと懇ろになり，男子フレデリックをもうける。しかしながら，男爵は家の事情のゆえにアガサを捨て，貴族の娘と結婚せねばならない。アガサは成長したフレデリックを兵隊に取られ，貧困のうちに倒れるが，再会した息子に救われる。アガサは息子に父親がウィルデンハイム男爵であることを告げる。男爵は息子に面会し，彼を引き取ることにする。

牧師アンハルトに関わる筋書きが，ここで劇の進展に介入してくる。ウィルデンハイム男爵にはアミリアという娘がいるが，彼女は牧師アンハルトと愛し合う仲である。アンハルトとアミリアは男爵を説得し，アガサを妻として迎えることに同意させる。男爵は家のために娘をカッセル伯爵と結婚させようとするが，アミリアはこれを拒む。彼女はアンハルトへの愛が誠であることを父に告げ，牧師との結婚を父に承諾させる。こういった内容の家庭劇である。

ここで問題になるのは，現実の人間関係と家庭劇との関連である。(7)家庭劇はもちろん作中劇であるが，この小説の内部に仕組まれた劇が，現実の人間関係に微妙に影響を与えてしまう虞があるのだ。バートラム嬢はラッシュワス氏と婚約しているにもかかわらず，クローフォド氏と親密な関係を演じるのは不謹慎である。たとえクローフォド氏が息子役を演じるとはいえ，母と子として心を通わせる関係を演じるのは問題があるだろう。また，カッセル伯爵は42個の台詞を任された愚鈍な男である。これをラッシュワス氏が演じるのは，現実のラッシュワス氏の価値をますます貶めることになる。それはつまり，バートラム嬢が彼を金持ちとはいえ見限るのに手を貸すのだ。また，牧師アンハルトに積極的な女性のアミリアが言い寄るのは，エドマンドを口説こうとするクローフォド嬢の姿を反映している。このように家庭劇は小説の筋書きの進展に影響を与えかねないのだ。

元はと言えば，この家庭劇は放蕩者の貴族イェイツ氏が，友人のレーブンショー卿（Lord Ravenshaw）のエクルズフォド（Ecclesford）にある屋敷で演じるはずのものであった。イェイツ氏は脇役のカッセル伯爵を演じる予定だったが，レーブンショー卿の近親者が急死したため上演は取り止めになってしまう。彼はカッセル伯爵の台詞をそらんじていた。こういうことをマンスフィールドの屋敷でイェイツ氏が話すと，トムは絶対にその劇をここで実現しようと言い張り，周りの意見を聞かなくなる。この劇は愚かな資産家の御曹司二人が持ち込んだ災いの種だったのだ。

この劇はその配役選定や練習過程を経て，いろいろな効果を小説にもたらす。イェイツ氏がウィルデンハイム男爵役を獲得するのはまだしも，ラッシュワス氏は愚鈍なカッセル伯爵役をあてがわれ，バートラム嬢から見限られる格好になる。せっかくサザトンの豪壮な領地をマンスフィールド・パークの人々に披露したのも，無駄になってしまうのだ。深刻な影響は，クローフォド兄妹をめぐる状況ががらりと変わってしまうことだ。もともと，クローフォド嬢はトムを結婚相手にしようとマンスフィールド・パークに乗り込んできた。長男の彼が恋の標的になるのは当然のことだ。ただし，彼があまりに浮ついた男であるがために，クローフォド嬢は彼を相手にしなくなる。そして，この家庭劇においてアンハルト役のエドマンドと共演することによって，次男坊を標的に定めてしまうのだ。彼に対して牧師という職業の無価値さを説き，世俗的方向に頭を向かわせようとしたのも，自分と同じレベルまで彼の価値観を貶めようとした行動の一環である。つまり，エドマンドにも聖職禄が与えられることには間違いはないであろうし，いずれは愚か者のトムの跡継ぎとなってマンスフィールド・パークの家長になることも期待できるので，この次男坊でもそれほど悪い選択でもないのである。同じ考え方は，クローフォド氏にも適用できるだろう。彼は当初はジュリアを狙ってマンスフィールド・パークに乗り込んできた。もちろん，バートラム嬢はラッシュワス家に嫁ぐことが予想されるので，次候補としてはジュリアがベストであろう。ところが，この家庭劇を大きなきっかけとして，自分の男ぶりの良さをバートラム嬢に訴えることができるようになる。一気呵成にバートラム嬢を攻め落としたらどうであろうか。頭の鈍いラッシュワス氏には似たような境遇のカッセル伯爵役をやらせ，42個の他愛もない台詞を任せておけばいいのだ。こうして見れば，クローフォド氏も本来の標的を相手に恋の作戦に没頭できるようになるのだ。この家庭劇の上演は，誰にも相手にされない長男トムはさておき，長女と次男を金目当てのクローフォド兄妹の手中に委ね，マンスフィールド・パー

クを危機に陥れる可能性のある企てだったのである。その危機を招いた元凶は，家の守護者たるべきトムだったのは大きなアイロニーである。

アイロニーはなおも折り重なっている。この家庭劇に大反対したのは，エドマンドとファニーであることを考えねばならない。本来ならば，次男のエドマンドは家の管理から一歩退いた，自由な立場の人間である。この次男が，積極的に劇の計画を推し進める長男をいさめて，こう強く上演に反対するのである。

> 'I think it would be very wrong. In a *general* light, private theatricals are open to some objection, but as *we* are circumstanced, I must think it would be highly injudicious, and more than injudicious, to attempt any thing of the kind. It would show great want of feeling on my father's account, absent as he is, and in some degree of constant danger; and it would be imprudent, I think, with regard to Maria, whose situation is a very delicate one, considering every thing, extremely delicate.' (113)

劇の上演は，父親がけっして安全とは言えないアンティグア島で汗水垂らして働いていることを考えれば，不謹慎である。それ以外に嫁入り前のバートラム嬢の立場を考えれば，少なくとも彼女にフィアンセ以外の男と密接な間柄の役を演じさせるのは常識を外れている。家庭演劇自体が危険なわけではない。しかし，この場合はあまりに常軌を逸した内容を具合の悪い時期に上演することになってしまう。それゆえ，エドマンドは上演に大反対するのである。自由な立場の人間が，家の安全と秩序の維持に心を砕くことはアイロニカルな状況をなしている。

では，なぜこのエドマンドが最終的にアンハルトを演じることに同意するのだろうか。その選択も「半ば」アイロニカルである。「半ば」という条件は，すぐ後で述べるように実に意義深い。エドマンドの逡巡ぶりに嫌気のさしたトムは，友人のチャールズ・マドックス（Charles Maddox）を呼び寄せて，彼に稽古をつけてアンハルトをやらせてみたいと提案する。ここに及んで，エドマンドは仕方なくアンハルト役を引き受ける。ファニーに対して打ち明ける，その理由の骨子はこうである。

> I know no harm of Charles Maddox; but the excessive intimacy which must spring from his being admitted among us in this manner, is highly objectionable, the *more* than intimacy—the familiarity. (138)

要するに，家庭劇は家庭内に封じ込めているうちはまだよい。しかし，外部の人間がそれに参加するために訪問し，家の乱れた秩序が外部に漏れ出すのはよくないというわけだ。もしそうなれば，別のいかがわしい男たちが屋敷を平気な顔をして訪れるようになり，家の秩序はさらに荒廃していくであろう。トムの交際ぶりを考え合わせれば，そうした判断はまことに正しいことに思われる。ということは，エドマンドは次男でありながら，アイロニカルにも長男よりも正しく家を守っているのだ。

ただし，これは『マンスフィールド・パーク』の優れた特徴であろうが，我々はただのアイロニーとは言いがたい理由で，エドマンドがアンハルト役を引き受けることを見逃してはならない。実は，ファニーも家庭劇への参加を一同によってせがまれていて，その役柄とはただの農夫の妻であった。農夫自体が脇役だから，これは脇役の脇役と言えよう。しかし，この取るに足りない役でもファニーは頑強に断り続ける。サー・トマスの姪に当たるファニーが，マンスフィールド・パークの秩序の維持に本来最も遠い位置にありながら，最も強く秩序の維持を主張するのは実にアイロニカルである。そして，ノリス夫人は唯一虐められる対象であるファニーをひどく責め，皆のために農夫の妻を演じるように迫る。エドマンドが守ってくれても，ノリス夫人は引き下がろうとしない。とうとう，ファニーは涙を流しそうになってしまう。そこで，クローフォド嬢が一瞬の判断で，こんな思いがけない行動に出るのである。

> Edmund was too angry to speak; but Miss Crawford looking for a moment with astonished eyes at Mrs. Norris, and then at Fanny, whose tears were beginning to show themselves, immediately said with some keenness, 'I do not like my situation; this *place* is too hot for me'—and moved away her chair in a kind low whisper as she placed herself, 'Never mind, my dear Miss Price—this is a cross evening,—everybody is cross and teasing—but do not let us mind them;' and with pointed attention continued to talk to her and endeavour to raise her spirits, in spite of being out of spirits herself.—By a look at her brother, she prevented any farther entreaty from the theatrical board, and the really good feelings by which she was almost purely governed, were rapidly restoring to her all the little she had lost in Edmund's favour. (133)

これはまことに微妙な表現であり，分析や解釈は困難である。クローフォド嬢はエドマンドに気に入られようとしてファニーに助け船を出したのかもしれない。そうではなく，本当に純粋に衝動から弱者のファニーに対していたたまれない気持ちになり，瞬間的に彼女をノリス夫人の悪意から救い出したのかもしれない。私見では，エドマンドがこの後で心を動かされることから判断して，クローフォド嬢には「瞬間的に」—「表層的に」という

追加条件をつけて一人のために動くことができるという，善なる人間性が備わっていると思う。この望ましい人間性が，叔父の提督による悪影響によって，成長を阻まれてきたのであろう。『マンスフィールド・パーク』という作品の優れた点は，こうした複雑で矛盾した人間性が同一人物の内部に共在していることを示し得たことである。[8]いわゆる平面的人間像ではなく，シェイクスピア的な球体的人間像の提示に，オースティンは成功しているのである。エドマンドがアンハルト役を引き受けたのは，その複雑なクローフォド嬢の人間性に共感を覚えたからであろう。とするならば，エドマンドはクローフォド嬢の美貌や手練手管にまんまと騙されて演劇への参加を決めたとも言えるし，彼女の真の人間性を見抜いてそうしたのだとも言える。ここで働いているのは単純な平板的アイロニーではない。そうではなく，人間性の複雑さは一義的に決定不可能であることを示す，見方によってはいろいろに見えてくる立体的なアイロニーが機能しているのである。

エドマンドはファニーに，クローフォド嬢への自身の感情をこう述べている。

> Put yourself in Miss Crawford's place, Fanny. Consider what it would be to act Amelia with a stranger. She has a right to be felt for, because she evidently feels for herself. I heard enough of what she said to you last night, to understand her unwillingness to be acting with a stranger; and as she probably engaged in the part with different expectations—perhaps, without considering the subject enough to know what was likely to be, it would be ungenerous, it would be really wrong to expose her to it. Her feelings ought to be respected. (139)

彼がクローフォド嬢に好意を持ち始めたのには，前の晩における彼女のファニーに対する態度が影響していることがわかるだろう。彼女はファニーが辛がっている様子を見たくなかった。これは確かであろう。同様に，劇のことで周りが揉めているのを見たくなかった。この解釈は不確かである。問題は「異なる期待」の意味である。これは見知らぬマドックスという男と演技するよりも，私（つまりエドマンド）と演技したいという期待かもしれない。同時に，劇の騒動が丸く収まって欲しいという期待を含んでいるのかもしれない。エドマンドのクローフォド嬢の行動への解釈も，彼女の自分への好意を嗅ぎ取ったという意味と，彼女には周りの人間関係を壊したくないという高潔な意図があるという意味の二様に分かれる。あるいは，自利と利他の両面が彼女の行動にはあると，エドマンドは見切ったのかもしれない。この両面は互いに排除的であり，アイロニカルな関係にある。この人間行動におけるアイロニカルな側面を，オースティンは適切に捉えて芸術化しているのである。

さて，この劇の行く末もアイロニカルな要素を持つ。サー・トマスの予想外に早い帰還によって，家庭劇は中止されてしまう。アンティグア島での仕事は案外と早く片付き，彼はリヴァプール（Liverpool）経由の民間船で帰国する機会に恵まれたのである。この突然の家長の出現は権威と放蕩の緊張ある激突の場面をもたらすかと思いきや，オースティンは実にコミカルに描ききっている。家族と歓談した後で，サー・トマスは書斎に籠もろうとする。そこは家庭劇の舞台であり，変わり果てた姿になっていた。家長の威厳が住まう場所である，堂々とした書斎は荒れ果てていたのである。そこでは何も知らないイェイツ氏が，金切り声を上げて最後のリハーサルに臨んでいた。その声の主が誰であるかもわからず，サー・トマスが呆気に取られて書斎のドアを開けると，目の前に現れたのは舞台上で叫び回るイェイツ氏の姿であった。その刹那，トムが部屋の別の端から現れ，三者が舞台上で鉢合わせになってしまう。オースティンは見事な舞台効果で，イェイツ氏とサー・トマスの出会いを描いている。

> His [Tom's] father's looks of solemnity and amazement on this his first appearance on any stage, and the gradual metamorphosis of the impassioned Baron Wildenhaim into the well-bred and easy Mr. Yates, making his bow and apology to Sir Thomas Bertram, was such an exhibition, such a piece of true acting as he would not have lost upon any account. (164)

劇の舞台が現実の世界に融合するような描写はコミカルでもあり，また深刻な要素を持つ。これこそが，アイロニカルな劇の効果だと言わねばならない。

家庭劇はそのまま，もしも演じられてしまっていれば，マンスフィールド・パークの現実の生活に影響を与えていなかったかもしれない。にわか仕込みの役者たちの心の中で，劇は劇のままで幕を下ろしていたかもしれない。結果から言って，劇の内容は現実のままになってしまうのだ。クローフォド氏はバートラム嬢と本当に懇ろの関係になってしまう。その派生として，イェイツ氏はジュリアに手を出してしまう。そして，クローフォド嬢はエドマンドの心を得ることになってしまう。演じられなかったからこそ，家庭劇が現実世界に激変をもたらした根拠は，登場人物たちの心の中に，あの劇を実際にやってみたいという願望が宿っていたからである。とりわけ，家庭劇への未練はクローフォド氏に強く見られる。彼は二度も，そのことに触れている。一度目は，バートラム嬢とラッシュワス氏の結婚が本決まりになったとき，彼はトムの耳元で，もしも『恋人たちの

誓い』の再上演が決まったら“he should make a point of returning to Mansfield, at any time required by the party”（173）と再訪問を約している。二度目は，バートラム嬢の嫁入り後，ラッシュワス夫妻がブライトン（Brighten）に滞在中に，彼はこう家庭劇の稽古中のことを述懐している。

‘I shall always look back on our theatricals with exquisite pleasure. There was such an interest, such an animation, such a spirit diffused! Everybody felt it. We were all alive. There was employment, hope, solicitude, bustle, for every hour of the day. Always some little objection, some little doubt, some little anxiety to be got over. I never was happier.’（203）

マンスフィールド・パークでの幸せな日々を取り戻す行為が行き着く先は，バートラム嬢との現実世界での恋の成就ではないであろうか。バートラム嬢も結婚を果たしたとはいえ，ラッシュワス氏のことを本当は愛してはいない。とすれば，後々の彼らの逃避行には家庭劇が影響を与えているはずである。

イェイツ氏も実現しなかった家庭劇の影響下にいたことは，小説の後半部において，クローフォド嬢がポーツマスの実家に滞在中のファニーに宛てた手紙の中で“Baron Wildenhaim’s attentions to Julia continue, but I do not know that he has any serious encouragement.”（359）と綴っていることに窺われる。そして，実際にイェイツ氏とジュリアのペアも逃避行の旅に出ることを考え合わせれば，家庭劇は実現しなかったからこそ，現実世界に強い影響を与えたというアイロニーが成立すると言えるのではないだろうか。

6．追放の旅がもたらすこと

クローフォド氏はとんでもない悪漢に思えるが，実は倫理的な側面も持っている。彼は二面性を持つアイロニカルな存在なのである。ファニーとの関係の初期段階では，彼は特筆すべき悪漢の相貌を帯びる。彼はあの家庭劇は是非とも上演すべきであったし，そのためにサー・トマスが一週間だけ帰還を遅らせてくれたらよかったのにと残念がる。その直後，荘園の体制守護者ファニーは，思わず“As far as *I* am concerned, sir, I would not have delayed his return for a day.”（203）と口走ってしまう。「叔父の到着は一日でも早い方がよかった」とは，真っ向から家庭劇の上演に反対する発言である。これはあまりにも突発的な発言だったので，後でファニーは赤面してしまう。ちょうどこの発言がきっかけとなって，クローフォドはファニーの貞節を奪う計画に着手するのだ。

マンスフィールド・パークでの滞在がつまらなくなった頃，クローフォド氏は妹に狩猟ができないときの暇つぶしにやってみたいことがあると切り出す。彼の邪悪な思いは，こんなふうに語られている。

‘But I cannot be satisfied without Fanny Price, without making a small hole in Fanny Price’s heart. You do not seem properly aware of her claims to notice. When we talked of her last night, you none of you seemed sensible of the wonderful improvement that has taken place in her looks within the last six weeks. You see her every day, and therefore do not notice it, but I assure you she is quite a different creature from what she was in the autumn. She was then merely a quiet, modest, not plain-looking girl, but she is now absolutely pretty ...’（206-7）

ここで指摘されているのは，ファニーの表層的な美だけである。これは，暇つぶしにあの小娘にちょっかいを出してみようかという，ふしだらな発言以上のものではない。クローフォド嬢は，ファニーは昔と変わらない小娘なのだから，恋のおふざけは止めるよう兄を説得しようとするが，そんな小言を聞き入れる兄ではない。

だが，クローフォド氏のファニーへの想いは真剣なものへと変貌する。この誘惑者の心境の変化は，彼自身の内部に自己向上への願いが潜在的に宿っていたことを証している。彼の変化のきっかけは，あるネックレスに纏わる事件であった。サー・トマスはファニーの兄ウィリアムがマンスフィールド・パークを訪問した際に，彼がやがて休暇明けには連隊に戻らねばならない身の上であることを知る。ファニーの気持ちを和らげようとする優しさからであろうが，この堅物の荘園当主は重苦しい雰囲気を一掃しようと，クリスマス前の異例な時期に舞踏会を催すことを決心する。運動が苦手なファニーも不承不承，参加しなければならない。だが，自分の胸を飾るネックレスがない。兄から贈られた十字架を胸につけたいが，それを吊す鎖がないのである。ネックレスがないことを知ったクローフォド氏は一計を案じ，自分から渡したらファニーは受け取らないだろうから，妹を通じて彼女にプレゼントしてやろうと考える。妹が手持ちのネックレスの一つを彼女に贈るという形にするのだが，このネックレスはかつて彼が妹へプレゼントしたものだった。言わねばよかったものと思われるが，クローフォド嬢はこのネックレスはかつての兄からのプレゼントだったことをファニーに告げる。ファニーはすぐにそれを返そうとするが，いったんもらったものを返すのも失礼に当たる。偶然にエドマンドが金の鎖をファニーにプレゼントしてくれ，それが例の十字架に通すにはぴったりだった。そのゆえに，エドマンドの鎖と兄の十字架で胸を飾り，彼女は舞踏会に臨むのである。こうした機会を通じて，クローフォド氏はファニーの志操堅固さを

知るに及ぶ。

ファニーの行動には私利私欲がなく，ウィリアムも立派な振る舞いの気持ちのいい青年だった。彼らの清らかさに，クローフォド氏は自分に欠けているものを自覚するのではないだろうか。彼は叔父の提督を通じて，ウィリアムを少尉に昇進させてやる。この行動は我欲に基づくものか，あるいは本当の親切心から出たものかは，にわかには決めがたい。おそらく，クローフォド氏の意図は両方なのではないか。こういうところに，彼のアイロニカルな性格の根拠が求められるのだろう。瞬間的かつ表層的なレベルで，善なる行動に向けて判断力が働くことは，クローフォド氏が妹と共有している特徴である。クローフォド氏の性格は平板的ではなく，立体的なアイロニーによって特徴づけられる。ウィリアムを少尉にするという善行を施しつつも，それによりファニーに恩を売りたい。ファニーを我が物としつつも，それにより自己の改善を図りたい。こうした矛盾する意思の介在によって，クローフォド氏の行動指針は場面によってなんとでも解釈できるようになってしまう。

ロンドンからの帰還後，彼はファニーへの燃える思いを妹にこう打ち明ける。

> 'I could not get away sooner—Fanny looked so lovely!—I am quite determined, Mary. My mind is entirely made up. Will it astonish you? No—you must be aware that I am quite determined to marry Fanny Price.' (263)

ロンドン行きは，当然ながら，叔父の提督を説得してウィリアムを少尉に昇進させてやることが目的だった。クローフォド氏によれば，ファニーは提督の偏見を取り去りうる唯一の女性である。すなわち，愛人を囲うことになんらの抵抗も感じない提督の女性観を変えることは，ファニーにのみ可能なのである。クローフォド氏の発言を追っていこう。

> 'When Fanny is known to him,' continued Henry, 'he will doat on her. She is exactly the woman to do away every prejudice of such a man as the Admiral, for she is exactly such a woman as he thinks does not exist in the world. She is the very impossibility he would describe—if indeed he has now delicacy of language enough to embody his own ideas ...' (265)

「この世にいないと思える女性」とは，まさに提督の女癖の矯正にはうってつけの女性であろう。提督の生活が自分たち兄妹にとって問題となっている—こうした難点の解決への意図がファニーへの求愛の中に幾分かは含まれているはずである。

ファニーへの燃える思いに，クローフォド氏自身の自己改善への意欲が含まれていたことは，次の地の文に明白である。

> Henry Crawford had too much sense not to feel the worth of good principles in a wife, though he was too little accustomed to serious reflection to know them by their proper name; but when he talked of her having such a steadiness and regularity of conduct, such a high notion of honour, and such an observance of decorum as might warrant any man in the fullest dependence on her faith and integrity, he expressed what was inspired by the knowledge of her being well principled and religious. (266)

ファニーこそが全幅の信頼が置ける，まるで北極星のような行動の指針となってくれる女性である。クローフォド氏にとって，何をなすべきかがわからないとき，彼女に従えばすべてが正しい方向に向かうのである。モラルの人ファニーこそが，クローフォド氏にとってまさに必要な女性なのだ。このことがわかっているクローフォド嬢は，兄の求婚に賛成するのである。

クローフォド氏の自己改善への意図は，アイロニカルに，完全に金の話としてのみサー・トマスには理解される。そして，このサー・トマスを高潔な荘園当主としてファニーが崇め奉るのもアイロニカルである。サー・トマスにとってファニーは素直な愛くるしい少女ではあっても，基本的には処分可能な「動産」にすぎない。できるだけ高く買ってくれるのであれば，あのエヴァリンガムのご当主様の嫁に出すのは願ったり叶ったりである。このクローフォド氏の求婚を断るファニーに，サー・トマスは大いに不満である。

> 'Am I to understand,' said Sir Thomas, after a few moments silence, 'that you mean to refuse Mr. Crawford?'
>
> 'Yes, sir.'
>
> 'Refuse him?'
>
> 'Yes, sir.'
>
> 'Refuse Mr. Crawford! Upon what plea? For what reason?'
>
> 'I—I cannot like him, sir, well enough to marry him.'
>
> 'This is very strange!' said Sir Thomas, in a voice of calm displeasure. 'There is something in this which my comprehension does not reach. Here is a young man wishing to pay his addresses to you, with everything to recommend him; not merely situation in life, fortune, and character, but with more than common agreeableness, with address and conversation pleasing to everybody ...' (285)

ファニーはエドマンドが好きなことは口が裂けても言えない。身分や境遇が不釣り合いなのは，誰の目にも明らかだからだ。それにしても，サー・トマスは，まったく

ファニーの気持ちを尊重しようとはしない。彼はこんな良縁を断る理由がさっぱりわからず，この少女がわからず屋やであるとしか思えない。この荘園当主は人間の心の奥底には他人には理解しがたい感情をあることがわからないし，わかろうともしない。彼にとって大事なのは，経済関係だけなのだ。仕舞いには，彼はファニーの態度を“a gross violation of duty and respect”（289）と呼び，“*ingratitude*”（289）という言葉遣いさえする。とどのつまり，サー・トマスの怒りは収まらず，彼女をしばらく実家に帰すことにする。(9)

サー・トマスの経済至上主義は明確である。ファニーを実家に帰す意図は，実家のみすぼらしさや人間関係のさもしさを痛感させ，マンスフィールド・パークを中心とした上流地主階級の文化の素晴らしさを心に刻み込ませることなのだ。そして，この企みにサー・トマスは大成功する。確かに，ファニーはポーツマスの実家の狭さ，汚さ，むさ苦しさを痛感する。父親のプライス海軍大尉は大酒飲みで，言葉は荒々しい。母親は苦労ゆえに若いのに老け込み，始終子供を叱りつけている。彼女がバートラム令夫人の妹とは信じられないくらいだ。７人の子供たちはいつもわめき声を上げ，喧嘩が絶えない。特にサム（Sam），トム（Tom），チャールズ（Charles），ベッツィ（Betsey）の下の４人の粗暴ぶりは耐えがたい。家庭に心の慰安を求めて帰ってきたファニーは愕然としてしまう。家庭の状況はマンスフィールド・パークとは雲泥の差だった。荘園屋敷の文化を特徴づけるもの—清潔な部屋，立派な家具調度品，家人への心配り，上品な言葉遣い，礼儀正しい振る舞い，正確な生活時間など—がファニーには本当に懐かしいものに思えてくる。

> When she had been coming to Portsmouth, she had loved to call it her home, had been fond of saying that she was going home; the word had been very dear to her, and so it still was, but it must be applied to Mansfield. *That* was now the home. Portsmouth was Portsmouth; Mansfield was home.（392）

マンスフィールド屋敷を我が家とみなす帰属感をファニーに抱かせることこそが，サー・トマスが彼女を実家に帰した目的であった。(10)そして，これには彼は見事に成功するのである。

しかし，ここでアイロニーの効果がまたも発動を開始する。ファニーに課した懲罰的な里帰りは，そもそもマンスフィールド・パークの体制を盤石なものにすることを狙っての方策であった。彼女がクローフォド氏との結婚に同意すれば，マンスフィールド・パークの経済基盤は安定するはずである。バートラム嬢をサザトンに嫁にやったように，サー・トマスは子供たちの行く末を幸福の尺度では計らず，資産安定を基準にして考えている。ここで，思いもよらなかった効果がファニーの帰省によって引き起こされる。それはマンスフィールド・パークを分解に追い込みかねないアイロニカルな効果であった。

ここで，この小説の風俗小説的側面を強調する事件が，マンスフィールド・パークで起こる。偶然に起こった事件と呼ぶべきであろう。長男のトムがニューマーケット（Newmarket）で落馬し，その後の養生が足りなかったので，ひどい消耗性の熱病に罹患してしまったのだ。これは一生続くかもしれない大病となってしまう。ファニーはバートラム令夫人から，心細い状態にいることを打ち明ける手紙を受け取る。

> ‘I cannot but say, I much regret your being from home at this distressing time, so very trying to my spirits,—I trust and hope, and sincerely wish you may never be absent from home so long again’（393）

面白い現象ではないであろうか。自分がマンスフィールド・パークに依存していると思った矢先，マンスフィールド・パークが自分に依存している文面の手紙を受け取るのだ。これはアイロニカルな状況である。一番小さな存在と思えた自分が，いつのまにか荘園ではバートラム令夫人の心の支え，サー・トマスにとっての愛くるしい姪御となっていたのだ。(11)

トムが病の床に伏してしまうことは，マンスフィールド・パークの異常事態を表す指標としても機能している。確かにただならぬ状況が荘園では進行していた。長男が倒れたにもかかわらず，バートラム姉妹はロンドンに行ったきり帰ってこないのだ。ファニーは鋭敏にも，バートラム家には，いざとなったら支えてくれる支柱のような存在がいないことに気づく。

そうした状況下で，さらなる危機がマンスフィールド・パークを襲う。父親プライス氏は読んでいた新聞の中に，ラッシュワス夫人（バートラム嬢）がクローフォド氏と駆け落ちした記事を見出すのである。これだけでも恐ろしい醜聞であるが，さらに悪いことに，ロンドンにいるエドマンドからジュリアもイェイツ氏と駆け落ちしたという知らせも届く。あの家庭劇を動かしていた情念が，現実の世界に息を吹き返したのだ。一家の安定を企図して行ったファニーへの懲罰が，逆に一家を破滅的な危機に陥れてしまうのだ。これは，まことにアイロニカルな状況であると言わねばならない。

バートラム姉妹の駆け落ちは，ファニーとは縁の遠い世界で起こったことと考えるのは誤りである。その事件のきっかけは，やはりファニーである。クローフォド氏はファニーへの想いを諦められず，ポーツマスまでやって来て，彼女の実家に好意を持ってもらおうと努める。プライス氏は上機嫌で彼との交際を楽しむ。しかし，これはファニーにとって別の種類の拷問であった。実家の貧しさや無骨さをはっきりと見られてしまうのだ。ク

ローフォド家に釣り合う上品さなど，実家にはどう期待しても無理であった。クローフォド氏はファニーへの愛が受け入れられず，業を煮やして，とうとうロンドンのウィンポール街（Wimpole Street）での放蕩生活に惑溺してしまうのである。その自暴自棄の生活の行き着く先が，ファニーの次に心を定めていたバートラム嬢との駆け落ちであった。ジュリアは姉の動きに連動して，これ幸いとばかり，イェイツ氏と逃避行の旅に出たのである。事の発端はファニーの志操堅固さだったのだ。

三ヶ月ほど経ってから帰還が許され—予定は二ヶ月だった—ファニーは再びマンスフィールド・パークの一員となる。エドマンドが迎えに来てくれるが，ファニーの希望でしっかりとした性格のスーザンも一緒に行くことにする。三人が到着すると，バートラム令夫人は大喜び迎えてくれる。この際に注目されるのは，ファニーがまるでマンスフィールド・パークそのものに迎えられるように描かれていることだ。彼女の目に映るパークの様子はこのようである。

> Fanny had been every where awake to the difference of the country since February; but when they entered the Park her perceptions and her pleasures were of the keenest sort. It was three months, full three months, since her quitting it; and the change was from winter to summer. Her eye fell every where on lawns and plantations of the freshest green; and the trees, though not fully clothed, were in that delightful state, when farther beauty is known to be at hand, and when, while much is actually given to the sight, more yet remains for the imagination. (407)

既に述べたように，この小説ではマンスフィールド・パークそのものの描写は多くない。その様子のほとんどがファニーの意識との関連で提示されている。オースティンは意図的に風景そのものがファニーの帰還を受け入れ，彼女が荘園屋敷の本質と深く結びついている印象を読者に与えようとしている。バートラム令夫人がファニーを歓迎していることは，やがてこの少女が女主人として自立する運命にあることを暗示している。

ファニーの懲罰としての里帰りが生み出すアイロニーはまだ終わらない。彼女はもちろんエドマンドが好きなのであるが，恋愛の主導権は彼にあるはずである。彼女から誘うなどということはあり得ない。ところが，エドマンドの将来計画を，ファニーは期せずして破壊してしまうのだ。クローフォド氏とバートラム嬢が駆け落ちしたために，バートラム家としてはクローフォド家ともはや親交を取り結ぶことができなくなってしまう。自分の家の長女に恥をかかせ，ラッシュワス家との関係を壊したのだ。もう，クローフォド家の人間とつきあうことなど，考えられない。したがって，エドマンドとクローフォド嬢の関係の発展は，ファニーが阻止した格好になるのである。エドマンドにクローフォド嬢を選ぶ権利はあるが，彼は家のためにそれを行使することが止められてしまうのだ。[12]

アイロニーの効果は連鎖反応的な事象に止まらず，人間心理の部分にまで及ぶ。エドマンドの人間理解そのものさえ，ファニーが影響を及ぼしてしまうのだ。クローフォド氏の駆け落ち事件が発覚する前まで，エドマンドはクローフォド嬢に夢中になっていた。彼が結婚相手として彼女を選ぶのはもちろん正しい判断である。社会身分の関係でも，経済力の点でも，やがて荘園領主となる彼がクローフォド嬢を選ぶのは正しい。しかし，地主階級が本来発展させるべき倫理的高潔さの点に照らせば，彼女は失格である。これに彼が気づくのは，ひとえにファニーのお陰である。兄の失態の後でクローフォド嬢がどんな態度を取ったのか，エドマンドは切々と語る。

> After a little reflection, he went on with a sort of desperate calmness—'I will tell you everything, and then have done for ever. She saw it only as folly, and that folly stamped only by exposure. The want of common discretion, of caution—his going down to Richmond for the whole time of her being at Twickenham—her putting herself in the power of a servant;—it was the detection, in short—Oh! Fanny, it was the detection, not the offence, which she reprobated. (415)

「注意力不足だった」とか「ばれただけの話」と言われてしまえば，要するに上手に浮気をすればクローフォド氏は許されることになってしまう。こんな倫理感のなさにエドマンドは辟易してしまい，クローフォド嬢を選ぶのは間違いであると痛感するのだ。そして，こういう心境にエドマンドが至るのは，ファニーのお陰なのだ。荘園屋敷の一番下の立場にいる少女が，将来の当主候補を正しい道に導くとはまさにアイロニカルではないか。もっと言ってしまえば，クローフォド氏を断ることによってクローフォド嬢の荘園屋敷への侵入を阻止し，ファニーはマンスフィールド・パークの体制を防御したとは言えないだろうか。

7．結語

『マンスフィールド・パーク』は効果的なアイロニーの言語によって構築された小説である。なぜ，これほどまでにアイロニーがこの小説では幅を利かせているのであろうか。その理由は，ひとえに女主人公のファニーが本来何の力も行使できない「弱い」人間だからである。[13]マンスフィールドの屋敷から牧師館までの半マイルほどの距離を二往復しただけで，すっかりくたびれて

しまう彼女である。虚弱で小柄で，いつも人に気を遣っている少女がお屋敷の女主人候補になってしまう―こんなことは，本来あり得ないことだ。であるから，ファニーは自分の能力を発揮し出世を「する」のではなく，いつの間にか屋敷で欠くべからざる人間に「なる」という体裁を，小説は取らざるを得ない。彼女は地霊のごとく，屋敷の女主人候補として居残ってしまうのである。サー・トマスは娘たちの駆け落ちを反省して，自分の教育についてこんなふうに述懐している。(14)

> Something must have been wanting *within*, or time would have worn away much of its ill effect. He feared that principle, active principle, had been wanting; that they had never been properly taught to govern their inclinations and tempers, by that sense of duty which can alone suffice. (422)

「何か内部で欠けていたに違いないもの」とは，地主階級の体制が持つべき核心的部分―モラル，常識，忍耐心，思いやりの類いのもの―であろう。こうしたものを貧困に喘ぐプライス家の娘が，自分の家の足りない部分を自覚し，バートラム家の本来持つべき威厳を感受し，徐々に身につけていったのであろう。しかしながら，貧しい家庭の娘が大バートラム家の秩序を救うとは，まことに強烈なアイロニーであると言わねばならない。

エドマンドとファニーの恋愛にしても，強く二人が愛し合っている部分はほとんどない。一家の醜聞を経て，自分はずっとファニーを慈しんできたのであり，ファニーこそが家庭内で最も大事な人であるという意識が，エドマンドの心理に立ち現れてくる―その結果として，二人は結ばれてしまうのである。サー・トマスもファニーが一家に存続すべき，大事な精神的部分を受け継いでいることを否定できず，二人の結婚を認めざるを得ない。二人の結婚は，いつの間にか，周囲の誰もが認めるものになってしまう。事情がファニーの境遇を決めるのであり，恋愛が発展して結婚に結びつくわけではないのだ。ファニーが「弱い」立場にあるがために，愛情が結婚という状況を生むのではなく，状況がエドマンドに愛情を意識させ，いつの間にか結婚が妥当という事態が二人を取り囲んでいる―オースティンは，こうしたアイロニカルな恋愛成立の手法を採用しているのである。

だが，彼らの行く末が順風満帆なわけではない。(15)なるほど，作者の采配によって，グラント博士が脳溢血で死んでしまう。おそらくは，美食が過ぎたためであろう。これにより，ソーントン・レイシー（Thornton Lacey）の牧師を務めていたエドマンドは，晴れてマンスフィールド・パークの牧師に収まることができる。彼とファニーは，名実ともにマンスフィールド・パークの秩序の守護者となるのだ。ところが，当のマンスフィールド・パークの将来はどうであろうか。いずれは，サー・トマスはこの世を去るであろう。あの放蕩者のトムはずっと寝たきりだが，健康を取り戻し，元の荒くれ者にならないとは限らない。荘園屋敷の相続権はやはりトムにあるのであり，彼次第でエドマンドとファニーをめぐる状況は大きく変わりうるのである。さらに，アンティグア島のプランテーションはどうなるであろうか。無能のトムが切り盛りできるとは想像しがたい。また，そもそも，プランテーション経営自体が奴隷貿易の上に成立した搾取経済である。牧師夫妻のエドマンドとファニーならば，こうした罪を生む農地管理は，当然ながら忌避すべき行為である。であるならば，エドマンドとファニーの世代がマンスフィールド・パークを引き継ぐことになれば，荘園自体はずっと縮小したものにならざるを得ないのではないであろうか。生活はずっと慎ましやかなものになるであろう。しかしながら，地主階級の道徳心は維持されるであろう。

この小説では，地主階級の生態が実に鮮やかなアイロニーの言語で批判されている。(16)サー・トマスの世代も，エドマンドの世代も，このアイロニーの言語の攻撃の標的となっている。面と向かった攻撃の言語が採用されていないのは，ファニーを地主階級のモラル的守護者として祭り上げるためである。だが，小説の最後はこういう文言で締め括られる。

> On that event they removed to Mansfield, and the parsonage there, which under each of its two former owners, Fanny had never been able to approach but with some painful sensation of restraint or alarm, soon grew as dear to her heart, and as thoroughly perfect in her eyes, as everything else, within the view and patronage of Mansfield Park, had long been. (432)

これぞ，究極のアイロニーではないだろうか。小説中，代々立派だったマンスフィールド・パークの姿はどこにも描かれていない。マンスフィールド・パークが「昔からそうであった」栄光の姿は不在なのだ。その栄光の姿は，ファニーの小さな頭にのみ存在しているのかもしれない。地主階級の栄光は海軍大尉の娘が敬慕する対象となってしまい，実際は見出しがたい過去の遺物なのかもしれない。オースティンはアイロニーの言語を用いて，地主階級の人間たちの実像を批判し，本来彼らがあって欲しい姿を示し得たと言えよう。

注

（1）アイロニーの定義については “In most of the critical uses of the term ‘irony’ there remains the root sense of dissembling or hiding what is actually the case; not, however, in order to deceive, but to achieve special rhetorical or artistic effects.” in M. H. Abrams, *A Glossary of Literary Terms*, 5th ed. (New York: Holt,

Rinehart and Winston, 1988) 91 によった。その機能については "Irony has many functions. It is often the witting or unwitting instrument of truth. It chides, purifies, refines, deflates, scorns and 'sends up'. It is not surprising, therefore, that irony is the most precious and efficient weapon of the satirist." in J. A. Cuddon, *A Dictionary of Literary Terms*, rev. ed. (Harmondsworth: Penguin, 1977) 339を参考にした。

(2) テキストは Jane Austen, *Mansfield Park*, ed. James Kinsley and John Lucas, the World's Classics Ser. (Oxford: Oxford UP, 1980) による。

(3) *Mansfield Park* における上流階級の振る舞いに対する批判は，Austenのどの小説におけるよりも強いとする見解はJane Nardin, *Those Elegant Decorums: The Concept of Propriety in Jane Austen's Novels* (Albany: State U of New York P, 1973) 82–108を参照。

(4) EdmundはAustenの小説群の中で，最も凡庸でつまらない人物とする解釈もある。この件はAndrew H. Wright, *Jane Austen's Novels: A Study in Structure*, new ed. (London: Chatto and Windus, 1961) 124を参照。

(5) Misty G. Anderson, "The Different Sorts of Friendship": Desire in *Mansfield Park*," *Jane Austen and Discourses of Feminism*, ed. Devoney Looser (London: Macmillan, 1995) 167–83はMary Crawfordとの対比においてFannyのキャラクターの分析を行っている。

(6) 家庭劇自体はAustenも好んだものであり，それ自体が悪いものではない。ただし，このBertram家の置かれた状況下で，劇を上演するのは道徳に反することである。こうした意見はJohn Halperin, *Jane Austen's Lovers and Other Studies in Fiction and History from Austen to le Carré* (London: Macmillan, 1988) 42を参照。

(7) *Mansfield Park* の演劇的特徴については Margaret Kirkham, *Jane Austen, Feminism and Fiction* (Brighton: The Harvester P, 1983) 107–10に指摘されている。

(8) Brown は Mary Crawford の行動規範が "superficial graces" により，Fanny のそれが "moral principles" によると言う。この件は Lloyd W. Brown, *Bits of Ivory: Narrative Techniques in Jane Austen's Fiction* (Baton Rouge: Louisiana State UP, 1973) 48–51を参照。

(9) Sir Thomasの父権に対抗する女性としてのFannyの分析はLeroy W. Smith, "*Mansfield Park*: The Revolt of the 'Feminine' Woman," *Jane Austen in a Social Context*, ed. David Monaghan (London: Macmillan) 143–58を参照。

(10) Fanny にとって，*Mansfield Park* への帰属意識の獲得が自由の獲得にもなることの分析については R. F. Brissenden, "*Mansfield Park:* freedom and the family," *Jane Austen: Bicentenary Essays*, ed. John Halperin (Cambridge: Cambridge UP, 1975) 156–96を参照。

(11) FannyがBertram家を支える人間に成長できるのは，彼女こそがその屋敷で孤独を味わってきたからだとする見解はMary Lascelles, *Jane Austen and Her Art* (Oxford: Oxford UP, 1963) 166を参照。

(12) 本来，Fannyの幸福がMary CrawfordとEdmundとの結婚の成り行きに依存していたことはW. A. Craik, *Jane Austen: The Six Novels* (London: Methuen, 1966) 91に指摘されている。

(13) Fannyにとって，自己実現は自分で何かを行うのではなく，周りに自己犠牲を評価してもらってもたらされるとする見解は Bernard J. Paris, *Character and Conflict in Jane Austen's Novels: A Psychological Approach* (Detroit: Wayne State UP, 1978) 37を参照。

(14) 誤った教育こそが*Mansfield Park*における悲劇の源であるとする解釈はH. R. Dhatwalia, *Familial Relationships in Jane Austen's Novels* (New Delhi: National Book Organisation, 1988) 64–65を参照。

(15) *Pride and Prejudice*の場合とは違う*Mansfield Park*における結婚の "negative force" についてはAlistair M. Duckworth, *The Improvement of the Estate: A Study of Jane Austen's Novels* (Baltimore: The Johns Hopkins P, 1971) 36–38を参照。

(16) Austen は *Pride and Prejudice* から *Mansfield Park* に至る執筆期間に，英国地主階級への信頼感を失っていったとする見解は David Monaghan, *Jane Austen: Structures and Social Vision* (Basingstoke: Macmillan, 1980) 93–114を参照。